

歴史を見続けた淀川、天下の台所大坂

戦国の乱世は、信長・秀吉・家康による全国制覇によって終結します。そして、統一政権の永続のために、刀狩り、検地、そして職業・住居・身分の固定化を行い、大名に対しても、しばしば国替え（領地を替えること）を行ったり、参勤交代をさせたりして強固な支配体制を築きます。

戦乱のない時代は、農業・手工業等生産力を発展させ、商業・流通・金融等も活発になり、都市が急速に拡大します。



淀川を往来する船

鳥飼東公民館壁画より

大坂城の攻防と摂津市域

織田信長のあとを引き継いで全国制覇をなしとげた豊臣秀吉は、支配の拠点として大坂城を築きます。その広さは現在の5倍という大きな城です。人夫は1日に3万人以上が働き、3年間かかったといわれています。城の周りには、新しく城下町も造られました。

秀吉の死後、豊臣氏の大坂城は、徳川家康の軍勢に攻められます。「大坂冬の陣」「夏の陣」とよばれる大戦争です。そのために、摂津市域を含む広い範囲が戦場と化しました。

中でも最も迷惑をこうむったのは、徳川方が淀川の堤防を鳥養辺りで切って、淀川の水を流し出したことでしょう。当然、鳥養辺りを中心に広い範囲が洪水となり、大きな被害が出たはずですが。

何のためにこんなことをしたのかというと、大坂城をとり巻いている濠や川の水を干しあげて、城を攻めやすくするためです。大坂城辺りの濠や川は淀川の水が引き込まれていたのです。

この出来事でどんな被害が出たのかについての記録は、まったく残されていないようです。

文禄（慶長）堤

秀吉は、伏見城を築くとき、同時に、諸国の大名に命じて淀川の両岸に新しい堤防を築かせています。この堤防は、水害を防ぐ目的だけでなく、船運の確保のためでもありました。

工事を命じた年が文禄5年（1596年・同年10月に慶長改元）だったために「文禄堤」とか「慶長堤」とかと呼ばれています。

「天下の台所」と淀川船運の発達

徳川時代になって、大坂は「天下の台所」と呼ばれるまでに商都として発展します。市中いたるところに運河が掘りめぐらされ、「天下の貨、七分は浪華にあり。浪華の貨、七分は船中にあり。」と呼ばれるような状況となります。諸藩は領内の年貢米や特産物を、主として大坂で金に換えて藩

財政に充てました。

全国の物流の拠点となった大坂は、倉庫業・運輸業・金融業なども発展させ、人の往来も活発になりました。

こうした中では、淀川の船運も盛んになります。三十石船・二十石船・伏見船などが有名でしたが、淀川筋・神崎川筋の下流域の間屋などが用いた道灘船もあります。

近世の大坂の人口は30万を超えていました。この大都市の住民が排出する尿尿の処理は、都市衛生上の大問題でした。一方、近郊農村では、肥料の入手・購入が大きな問題でした。この両者を結んだのが屎船（コエブネ）業者でした。当時の淀川には多数の屎船が多数行き交っていました。

また、これらの屎船の航行については、大坂町奉行も尿尿の搬出という衛生面の見地や、尿尿は商品ではないという見地から、運上銀を免除し、航行を認めていました。しかし屎船は、尿尿を運ぶだけでなく、しだいに村々の農産物を大坂に運びだすようになり、過書船や大坂市中の特権川船の権利を侵害し、争論を起こすようになります。

なお、日本では人糞が肥料として使われたため、都市の衛生状態が良く、ヨーロッパ人を感心させたようです。



桶船（屎船）

桶に下尿を入れて運送しました



部切船（屎船）

下尿を入れるため、船に仕切りをしたもので、間船ともいいます。いずれも『和漢船用集』より

活躍した渡し舟

淀川の船は、上り下りの船だけでなく、「横渡し船」も活躍していました。対岸から対岸へと貨客を運ぶものでした。

江戸時代に運行していた摂津市域の渡しは次のものがありました。

鳥飼には三本松（または願正寺）渡し、治歩多（ジブタ）渡しがあり鳥飼西や鳥飼下と対岸の佐太村とを結んでいました。この二つの渡しが合併してできたのが鳥飼の渡しです。鳥飼の渡しは、大阪府が管理運営する最後の渡しとして、昭和42年まで運行していました。

一津屋には宮の下（駒頭）渡しがあり、対岸の大庭大切とを結んでいました。この鳥飼と一津屋の渡しは、いずれも戦国時代末期頃まで歴史をさかのぼることができる古くからの渡しです。

神崎川の上川島渡しは別府にありました。南北朝のころからあったと伝えられていますが、根拠ははっきりしません。

市域を通る街道

江戸時代、摂津市域を通る主な街道は「亀岡街道（千里丘小学校の北側を通る道。大坂と亀岡を結ぶ。）」と「高槻街道支線（淀川堤防の上。大坂、高槻、京都を結ぶ。）」でした。

淀川およびその渡しと内陸部を結ぶ街道としては「枝切街道（茨木方面）」、「市場街道（山田方面）」、「乙辻街道（北摂山地方面）」がありました。いずれも荷車がようやく通れる程度の細い道だったようです。

それらの街道には、方向を示す道標が江戸時代中期以後、多く造られました。



千里丘七丁目
市場池オアシス
広場の中にある
道標
亀岡街道と小野原
街道の角